時事

◎橘絲重女史

同

また長く樂會の壇上に相見ざるものを、當代ピヤノの好寵兒橘絲重女史となす。敢て問ふ、女史また幸に健在なりや否や。聞くが如くんば、君の胸中常に詩想の混々として流れ盡きざるものあり。憂思綿々、絶えず襟(きん)を潤ふすとか。今や樂界その人ありが如くにして、しかも詩的宗教の素養を欠くもの、比々然らざるはなし。この時に當りて、世の女史に嘱するや實に大なり。徒に拱手退隱して、浮き身に人生の哀れさをかこつのみ、まこと樂人の能事ならんや。人生の不平と人事の多恨とを其指に宿として彈すべし。而して樂臺に神來の聲あらしむべし。一陽來復して春笑はんとする時、櫻花青葉いろ豐かなる忍が岡の樂堂に、それ再び君を見ることを得んか。徒に人の世の錯誤多きに欺かれて、自ら棄つることなく、愼んで自愛せられよといふ。時や寒(かん)に近し、漫りにもとめて衰ふるをやめよ。

【入力者注】記事の著者名が「同」となっているのは、前の記事の著者「有美」のことです。

初出・底本：「女學雜誌」
明治三十二（1899）年
十二月二十五日發行
入力：小林　徹
公開：令和六(2024)年二月十三日
修正：令和六年二月二十九日
橘糸重【資料リスト】に戻る。